

今から千年ほど前、ノルウェー人はロングシップというスピードの出る船を漕いで北ヨーロッパのあちこちに出没した。財宝を求めてイギリスやフランスの教会や修道院や町を襲つた者もいたし、土地を求めて人の少ないスコットランドの海岸やアイスランドに移住した者もいた。なかにはアメリカにまで到達した者もいた。九世紀から十一世紀半ばにかけて、ノルウェーは激しく人が移動する時代であった。ノルウェー人を含め、私たちはこの時代に海外に展開したスカンディナヴィア人をヴァイキングと呼ぶ。

勇武を美德としたヴァイキングにとって、未知の世界に旅立つこと、戦闘で敵をなぎ倒すこと、故郷に財宝を持ち帰ること、一国の支配者になること、そして英雄的な死を迎えることは、いずれも誇るべき誉れであった。どれか一つにでも成功すれば、生きている間に詩人たちが宮廷でスカルド詩という賞賛の歌をうたい、死んだあとには家族や親類が顕彰碑であるルーン石碑にその事績を刻ませた。先ほど述べた事柄は、一つですら成功させることが困難だったからである。それにもかかわらず、そんな誉れを一人ですべてなし遂げた人物がいる。ノルウェー王ハーラル・シグルズソン（一一〇一～五〇六）である。

一〇三〇年、異父兄オーラヴ聖王がトルンハイム近郊のスティクレスタで豪族たちに敗北すると、ハーラルもまたノルウェーから身を隠さねばならなくなつた。彼はガルザリー（ロシア）に向かい、キエフ公国（ヤロスラフ）の元に身を寄せた。しかしながら、ハーラルはヤロスラフの宮廷でただわが身の不運を託つていたわけではない。彼は戦士たちを率い、この寒冷の地を出てミクラガルズ、つまりビザンツ帝国の首都コンスタンチノポリスに向かつた。

コンスタンチノポリスは、壯麗な宮殿、教会、競技場が立ち並び、様々な出身の人びとが行き交う当代随一の都であった。ビザンツ帝国では以前から、ヴァリヤーギと呼ばれたスカンディナヴィア出身の戦士たちが、その勇猛さゆえに重宝されていた。ノルウェー王の歴史を綴つた著名なサガである『ヘイムスクリーニングラ』によれば、ハーラルはコンスタンチノボリスに滞在中、シリア、北アフリカ、シリニアを略奪した。地中海世界は北海世界とは比べ物にならないくらいの富に溢れていた。彼はブルガリアにも出征し、さらには聖地エルサレムの聖墳墓教会まで訪問したという。ハーラルの死後二百年近くたつて記録されたこの話がどこまで現実を反映しているのか判断が難しいが、地中海をヴァイキングたちが暴れま

わったことは確かである。ほぼ同時代の他の年代記にも書いてあるし、ヴェネツィアの獅子像の右肩にはルーン文字すら刻まれている。もちろん、それがハーラルの遠征と関係があるかどうかはわからないが。

ハーラルがノルウェーを出てから十五年が過ぎた。ノルウェーでは、ハーラルの甥マグヌス善王が王としてすでに君臨していた。キエフ公ヤロスラフの娘を娶ったハーラルは、一〇四五年にノルウェーに帰還し、共同統治する王として認められるよう、マグヌス王に迫つた。マグヌスはハーラルの主張を認め、ノルウェーは二人の王が並び立つことになった。翌年、マグヌスは急死した。その死因が何であったのか、なぜかどの史料も明言していない。その後ハーラルはデンマークに食指を動かし、ライバルであるデンマーク王スヴェン・エストリーズセン（在位一〇四七～七四）とのあいだで戦闘や略奪が繰り返された。決戦は一〇六二年、当時のデンマーク王国とノルウェー王国の境、ハッラン地方のニズで交わされた。ハーラルは勝利し、自らの力をスカンディナヴィア世界に誇示した。

ヴァイキングの長い歴史の中で、冒険者としても君主としても、彼ほどの成功を収めたものはいない。いるとすれば、ハーラルの異父兄オーラヴ聖王を玉座か

9世紀から11世紀半ばにかけて、ヨーロッパ各地を襲った勇猛果敢なヴァイキング。なかでも苛烈王ハーラルは、はるかエルサレムまで転戦した。

ノルウェー  
人物史

1

# ヴァイキング最強の王 ハーラル苛烈王 1015～66

文 小澤実 [北欧中世史家]

ら追い落とし、イングランド、デンマーク、ノルウェー三国の王位を兼任したクヌート王（在位一〇一六～三五）くらいだろう。理想的なヴァイキングとして、立ち止まることなくひたすら我が道を突き進むハーラルは、ひょっとするとライバルのスヴェン・エストリズセンよりも、その叔父にあたるクヌートへの対抗意識を燃やしていたのかもしれない。

舞台は北海の彼方イングランドに移る。

『アンゴロサクソン年代記』C写本は、一〇六六年四月二十四日、これまでに見たことのないような尾を引く星がイングランド上空に現れたと伝える。それは七十六年周期でめぐつてくるハレー彗星であった。この年、誰もが何事かがおこると予兆したに違いない。イングランドはエドワード証聖王からハロルド・ゴドウインソンに王位が移つたばかりであり、新体制への移行のさなかにあつた。すでにクヌートの海上王国は瓦解し、彼の息子ハーデクヌーズもこの世を去つて二十年以上が過ぎていた。ヴァイキングの支配の記憶は薄れつたあつた。

一〇六六年九月、ハーラルは艦隊を率いてイングランドへ向かつた。イングランド北方ノーサンブリアに上陸したハーラル軍は、すでに南方からイングランドを略奪して回っていたハロルドの弟トスティと合流した。トスティはノーサンブ

リア伯の地位から追放されたため、ハロルドとは不仲であった。九月二十二日、ハーラル・トスティ連合軍はヨーク郊外のフルフォードで現地のイングランド兵に勝利した。ヨークで糧食や人質をせしめたノルウェー・ヴァイキングたちは、さらに奥深くに突き進んだ。

九月二十五日、スタンフ

ォードブリッジでイングランド王ハロルド・ゴドウインソンとハーラルは対峙した。人質の取引が名目であった。しかしながらハロルド王は攻撃を仕掛けてきた。半日ばかりの乱戦の末、ハーラルもトスティも落命した。しかし勝利したハロルドも、英仏海峡を越えてやつてきたヴァイキングの末裔ノルマンディ公ギヨーム、すなわち後のウイリアム征服王との戦いにより、程なくヘースティングスの野に散る。この時期を境に北ヨーロッパの勢力地図は大きく変わろうとしていた。

ヴァイキングとしての名誉をすべて手に入れたこのハーラルは、後世「苛烈王」と渾名された。彼を讃えるスカルド詩は数多く伝来し、「ヘイムスクリングラ」



の一部をなす『ハーラル苛烈王のサガ』も百章をこえる長編である。ハーラルが後世のノルウェー人に与えたインパクトがいかほどのものであったのか、推して知るべしである。理想的なヴァイキング、それがハーラル苛烈王であった。